

視覚教材と学生の相互評価を用いた実習記録指導の効果

小久保裕美*

1.はじめに

(1) 研究の目的

本研究の目的は、視覚教材と学生同士の相互評価を用いた実習記録指導の効果を学生の記録及びアンケート結果から明らかにすることである。

(2) 背景

保育専攻学生は、現場実習を行う時に、見たり聞いたりした体験を実習記録に記録することが求められる。しかし現場で繰り広げられるこれらの出来事や体験をわかりやすく言葉にすることは容易ではない(市東2015、2016)。筆者は、施設実習へ行く学生に「他の人が記録を読んだときに、書かれている事柄が目の前で再現できるように書いているといいね」と伝えているが、主観的な出来事を言葉にして他者に伝えることはなかなか難しい術である。いざ書こうと思うと、浮かんでいた事柄が硬直化し、箇条書きになってしまうこともある。その上、書き手には、実習を行う保育者を目指す学生としての立ち位置がある。保育職としての眼差しが記録に反映することが望ましい。ましてや、子どもをどのように見るかも学んできた知識を重ねるほうがよいと考える。

このように学生がよりわかりやすい記録を書くための課題は多くある。一方で学生が難しいと感じている記録を教える側がどのように教示すれば効果的か、これがまた難題である。授業で教科書などの実習記録モデルを例示として使ったことがある。その際、練習シートにそのモデル内容をそのままそっくり記述してしまう学生がいた。また、実際に現場へ行った経験が少ないなかで記述の練習をするため内容が出来事の羅列のように単調になることもあった。実際にその場で生身の人に出会っている臨場感を記録にどのようにわかりやすく入れるかが難しい。

実践場面が含まれていて関わりが記述しやすいツールはないか探しているときに、新人のケアワーカーの援助体験が取り上げられている映像を見つけた(三浦規、梅橋千恵子監修、ひとり1人が輝く認知症ケアシリーズvol.1)。このDVD映像は介護分野の映像である。新人ケアワーカーが利用者に散歩の呼びかけをするところから映写されており、その後散歩をする様子が新人ケアワーカーの関わりに焦点を当てて淡々と描写されている。その上、新人ケアワーカーの関わりに対するスタッフ・ミーティングが後日持たれており、様々な先輩からの助言場面が含まれていた。この映像を用いて2015年6月に介護等体験を受講した学生へ記録に関する授業を実施した。その結果、学生の記録が臨場感を伴い生き生きと描かれる経験をした。

そこで、保育実習指導(施設)の実習記録授業をこのDVD映像を用いて行うことにした。授業の実施時期は3年生の前期である。学生の記録に関する授業は、1年次前期の「関わり体験」と2年次後期の「保育所実習」である。関わり体験は、近隣の保育所へ6回2時間程度の乳幼児への関わり体験を行うものであり、直前に記録についての授業を受け記録を作成している。また2年生後期には保育所実習を2週間行い実習記録を書いている。

* 東海学園大学教育学部教授

映像を用いた記録の先行研究をレビューでは、島崎（2015）の実践報告があった。島崎は作成した視覚教材を用い、学生に記録を取らせ、学生同士で意見交換（相互添削）しているとあった。内容は「ある保育所の年中クラスの一日の保育の流れをビデオカメラに収め、実際の保育内容を観察することで保育を疑似体験し、ビデオ画像により観察した内容を日誌として記載する方法」である。疑似体験が6場面あげられており、保育を行ったのは現場の保育士や学校教員であると記述されていた。

本研究の記録は、学生が新人ケアワーカーの関わり場面を視聴し、新人ケアワーカーを疑似体験して記録をしたものである。その実践する内容に焦点を当てるといふより、新人ケアワーカーの利用者への関わりを記録として生成することに意味をおいた。また島崎の実践報告は方法の紹介が主であり、学生の記述の評価はなされていなかった。

2. 研究方法

(1) 講義の実施方法と調査対象

2016年7月22日の「保育実習指導 I（施設）」である。学生は「保育実習 I（施設）」の受講者3年の学生54名である。

最初に記録の要点と記録に関する問題の具体例を入れたレジュメを学生に配布し、講義を行った。その後、DVD（三浦等：前掲）を視聴させ、学生が登場人物である新人ケアワーカーになったと想定し、散歩シーンの利用者との関わりを記録してもらった。そしてその後、学生が書いた記録用紙を席の近い学生と交換し、講義の内容に沿ってお互いの記録の評価をし合う時間を持った。ここでなされた評価は配布した評価記入欄に学生が自ら記入し、その上で学生に改めて自身の記録の課題を記入させた。

その後再びDVDに戻り、新人の散歩に関する評価が入ったスタッフ・ミーティングを視聴した。スタッフ・ミーティングでは、新人ケアワーカーの関わりに対する意見や評価が具体的に出された。学生には、自身が記述した記録と課題を再度ここで確認するように伝えた。その上で新人ケアワーカーとスタッフのやり取りからどのようなことを感じたか学生に記述させ、最後に筆者が講義のまとめを行った。

なお、アンケートは無記名で、アンケート用紙の冒頭に「記録研究をするためと今後の授業に役立てるため」アンケートを実施すると明記しており、口頭でもアンケートと記録内容の一部を文章化して公表すること、匿名性の保持をすることを伝え学生の同意を得た。DVDを視聴後の学生の記録は記録した個人が特定できないように複数の記録を合成して筆者が再構成して、作成した。

(2) 「実習記録」の授業内容

1) 実習日誌について

- ①施設・機関の日課
- ②実習内容の記載
- ③一日の振り返りの内容
- ④実習後の感想、反省

2) 記述するにあたっての留意点

記述するにあたっての基本的なことがらを11項目入れた。

内容は、記述するときの留意点。例えば、誤字・脱字がないこと、訂正は二重線など。

主語と述語を考える、長文にしない。段落を変えて読みやすくする。日記風にならない。日本語を正しく使う。プライバシーの配慮等。

(3) DVD視聴と学生の記録（記録、他学生の評価、課題）

DVDの内容：女性の新人ケアワーカーがグループホームのホールで利用者2人に声をかけ散歩に誘う。歩行者がいない道路を、近くの建物や道端の花や野菜などを指さして、利用者と会話しながら散歩をする。

(4) アンケート調査内容と分析方法

1) アンケート項目

・今回の授業は役にたったか

①役に立った②少し役に立った③あまり役に立たなかった④役に立たなかった

・役に立ったと回答した人に、何が役に立ったか

①講義内容②映像を見て自ら記録化してみたこと③他学生との振り返り④その他

2) 分析方法

学生の学びの分析は、2つの方法で行う。

ひとつは学生が記述した実習記録の評価である。事前に行った記録の要点をもとに記録の内容を分析し、評価する。

ふたつ目はアンケート調査結果についてである。各質問に対して該当する回答を“1”それ以外を“0”とし、それぞれの回答の平均を算出した後、一要因分散分析を行った。なお、主効果が有意な場合は多重比較を行った。

3. 結果

(1) 学生の記述分析

1) 学生Wの記録より

(記録)

「散歩に行きましょうか」と声を掛けるところ、AさんとBさんが快く散歩に行くことを承諾してくれた。Aさんが早く歩いて、Bさんはゆっくり歩く。散歩の途中、サッカースタジアムの話や育ててある植物、咲いている花などの話を利用者さんに投げかけながらグループホームの周りを散歩しただけであるが、利用者さんが嬉しそうだった。

(他学生の評価)

利用者さんの言葉を記述すること。

ケアワーカーの感情を書くこと。

一文が長い。

(課題)

カッコのなかに利用者の言葉を入れて会話の情景がわかるようにする。

自分が感じた感情を詳しく書く。

一文を分けてわかりやすくする。

2) 学生Yの記録より

(記録)

利用者AさんとBさんに「お散歩に行きませんか」と声を掛け、気持ちを確かめてから散歩に出かけた。施設を出たところでAさんが重そうなカバンを持っていたので、「持ちましょうか?」というカバンを預けてくれた。少し歩くとAさんがスタジアムに興味を示した。私が「サッカーしたり、運動するところ」と説明をすると、「運動するよ」とAさんが言った。一方Bさんは野菜や植物に興味を示し、植物の名前を教えてくれた。

Bさんと話していると、Aさんはまわりに興味を示さず、手をぎゅっと握りしめてどんどん歩いていってしまったので、どうしたらよいかわからなくなった。

(他学生の評価)

詳しく書かれていた。

心情が入っていて良い。

気遣いが書かれていた。

(課題)

細かいところをもっと見ていなくて、記録がざっくりしてしまった。

利用者さんBとの会話を書けば良かったと思った。

感じたことをもう少し具体的に書くと良いと思った。

(2) アンケート調査結果

1) 「今回の授業は役に立ったか」では、50%が役に立った、42%が少し役に立ったと答えた。

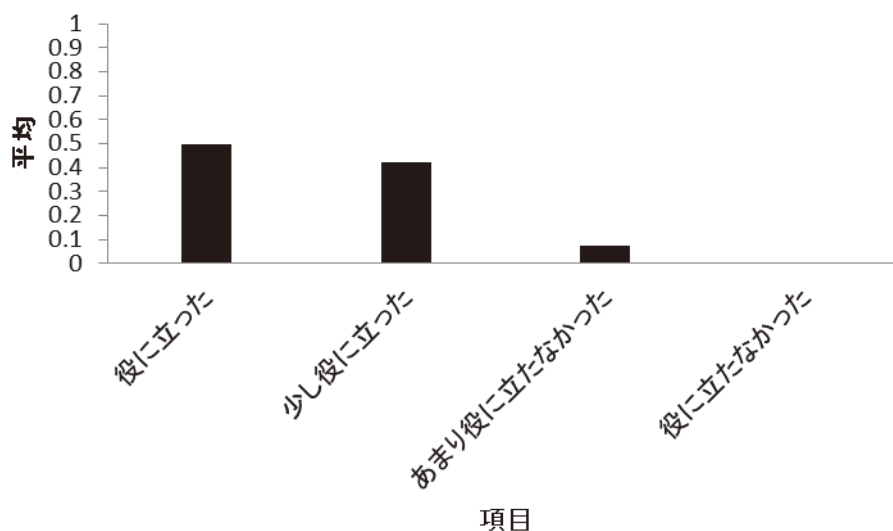


図1 「今回の授業は役に立ったか」について

表1 「今回の授業は役に立ったか」

水準1	水準2	平均1	平均2	差	統計量	P 値	判定
役に立った	少し役に立った	0.50	0.42	0.08	1.03	1.00	
役に立った	あまり役に立たなかった	0.50	0.08	0.42	5.68	0.00	**
役に立った	役に立たなかった	0.50	0.00	0.50	6.72	0.00	**
少し役に立った	あまり役に立たなかった	0.42	0.08	0.35	4.65	0.00	**
少し役に立った	役に立たなかった	0.42	0.00	0.42	5.68	0.00	**
あまり役に立たなかった	役に立たなかった	0.08	0.00	0.08	1.03	1.00	

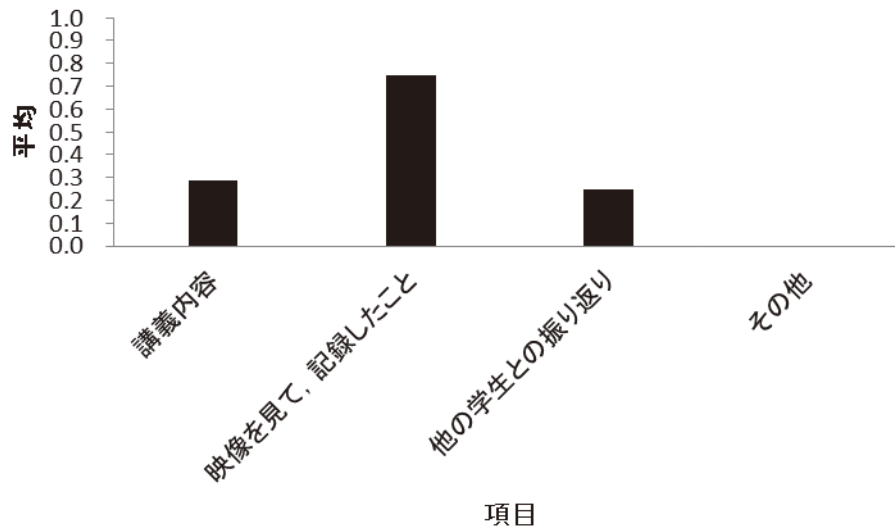


図2 「何が役に立ったか」について

表2 「何が役に立ったか」について

水準1	水準2	平均1	平均2	差	統計量	P 値	判定
講義内容	映像・・・	0.29	0.75	0.46	6.12	0.00	**
講義内容	他の学生・・・	0.29	0.25	0.04	0.51	1.00	
講義内容	その他	0.29	0.00	0.29	3.82	0.00	**
映像・・・	他の学生・・・	0.75	0.25	0.50	6.63	0.00	**
映像・・・	その他	0.75	0.00	0.75	9.94	0.00	**
他の学生・・・	その他	0.25	0.00	0.25	3.31	0.01	**

2) 何 (どの授業) が役に立ったか

本授業の何が学生にとって役にたったのだろうか。その点に関して、明らかにするため、授業内で実施した内容について一要因分散分析を行った。その結果、「講義内容」と「映像を見て、記録したこと」、「講義内容」と「その他」、「映像を見て、記録したこと」と「他の学生との振り返り」、「映像を見て、記録したこと」と「その他」、「他の学生との振り返り」と「その他」に有意差が認められた ($p < .01$)。つまり、映像を見て記録することが他の項目と比較して、特に学生間の中で、役に立った要因であると思われる。この結果から、学生が記録しやすい映像を用いて、記録を練習することは有効な方法であることが明らかになった。

4. 考察

学生の記述を分析をする。利用者を散歩に誘う記録のはじめは、それぞれ学生が利用者に散歩の働きかけを行い、情景がわかりやすく記述されている。その後Wの記録は援助者側から観察した散歩の情景が主である。Yの記録は、援助者側の散歩中の声掛けが具体的に記述され、利用者の応答が書かれている。その中で利用者Aさんの行動に不安を覚えたことが記載されていた。

他学生の評価はどうだろう。Wの記録では「利用者さんの言葉を記述する、ケアワーカーの感情を書く、一文が長い」の3点であった。Wはその3点についてきちんと受け止め、より丁寧な言葉で課題を記述した。他者によって外在化された課題を学生自らの課題として内在化したといえる。言葉で明記することに意味がある。学生Yの記録については、「詳しく書かれていた、心情が入っていて良い、気遣いが書か

れていた」とポジティブなものであった。しかし、Yは「細かいことをもっと見ていなくて、記録がざっくりしてしまった、Bさんとの会話を書ければ良かった、感じたことをもう少し具体的に書くと良かった」と記述した。これだけを見ると、Wが他学生の評価に回答していない。筆者は学生同士の相互評価後に、全体でのセッションを行い、数名の学生に評価と課題の発表を求めた。Yは他学生の発言を聞いて、あらためて自分自身の関わりの振り返りをし、そこで気が付いたことを記述したのではないだろうか。全体での振り返りは重要であることが確認できた。

DVDで行われたスタッフ・ミーティングは、グループ・スーパービジョンとしての機能を持っていた。そこで「利用者Aさんがケアスタッフの手を強く握りどんどん歩いて行ったのは、Aさんが入所したばかりで見知らぬ土地の散歩に不安が増していた」と指摘があった。そこで散歩前にクライアントの状況を確認する必要があることがわかった。多くの学生がここで「Aさんが不安だったことにはじめて気づいた」と記述した。しかし、学生Wはどんどん歩いていくAさんへの不安を記録化し、すでに感じ取っていた。この気づきは意味あることである。スタッフ全体の振り返りを視聴し、学生が利用者の気持ちをより深く理解したのだと感じた。

他の学生との振り返りについてアンケートでは20%の学生が評価していると答えた。本稿で取り上げた記録例では他学生の指摘から課題が明確になったと記述している学生がいた。記録を他者と評価し合うことはより自分自身の課題が明らかになることがわかった。そのことがより良い記録を書くモチベーションになるといえる。先に述べたように全体での振り返りも重要である。評価の確認は重層的に行うことが必要だといえる。

授業が役だったかについて一要因分散分析を行った。その結果、「役に立った」と「あまり役に立たなかった」及び「役に立たなかった」、「少し役に立った」と「あまり役に立たなかった」及び「役に立たなかった」に有意差が認められた ($p < .01$)。これらのことから、本授業は、記録に関するスキルを身につける上で、役に立ったといえる。つまり、映像を見て記録することが他の項目と比較して、特に学生間の中で、役に立った要因であると思われる。この結果本授業は、学生の役に立つ授業であったと思われる。

附

本研究のアンケート調査及び記述に関して、本学の研究倫理委員会（29-5）の承認を得た。

参考文献

- 愛知県保育実習連絡協議会「福祉施設実習」編集委員会編（2011）保育士をめざす人の福祉施設実習、みらい。
- 小久保裕美、キャリア開発センター（教職支援）平成28年度保育実習（施設）の手引き、東海学園大学教育学科。
- 岡村重夫（1965）ケースワーク記録法 その原則と応用、誠信書房
- 島崎あかね（2015）保育実習Ⅰ（保育所）事前指導における実習記録の指導内容：視覚教材の活用について、上田女子短期大学幼児教育学科保育者養成年報2015（5-7）
- 市東賢二（2006）実習における記録の意味（施設実習）：保育実習（施設）における記録と記述をめぐって、上田女子短期大学幼児教育学科保育者養成年報2006（19-27）